

子どもと保育の情景 (14)

「いーいーと、いーいーと、考えた！」

戸田雅美

登園から一時間ほど経過した四歳児の保育室では、さまざまな遊びが所狭しという感じで展開されていた。

そんな保育室の、ままごとの遊具のある近くでは、ゆうかとまいがままごとをしていた。積み木で玄関や間仕切りを作つてあるところを見ると、二人は熱心におうちを作つていたらしいことが見て取れた。

しかし、今はままごと遊びの展開がいまひとつ楽しいものになっていないらしい。ゆうかが「あの人形（ぬいぐるみ）をもつてこよう！」という

と、二人でぬいぐるみを取りに行き、おうちに連れてきたものの、特にそのぬいぐるみで何をするというのでもない様子だった。何かを言い出すのは決まつてゆうかで、まいは、いつも「そうだね！」とうれしそうに一緒に動いていた。私は、こんな具合にまいに受け止めてもらえるから、ゆうかは楽しいのだろうな…と思ひながら見ていた。

しばらくすると、まいもさすがに退屈になってきたのか、「ねえ、この人形で人形劇やらない？前にやった続き！」とゆうかに誘いかけた。そういえば、ぬいぐるみは、手にはめて人形劇ができ

るようになっていゝるもので、そのぬいぐるみがあつた近くには、子どもが舞台代わりにできそうな手ごろな衝立が置いてある。きつと、最近このクラスの子どもたちが遊ぶので、環境として用意してあるのだらうと思ひ当たる。

ところが、ゆうかは「じゃ、ままごとはどうするの?」と、人形劇という提案にはのりきれない様子である。まいは「人形劇はお仕事で、このうちに帰つてきて、ご飯食べたり寝たりするつていうのは?」と答える。なるほど、いい考え…。けれども、ゆうかは即座に「だめ! そんなのつまらない!」と答える。「でもさ、この前みたいに、キツネの誕生日つていうのやろうよ。ゆうかちゃん、キツネでさあ…」とまいは粘る。でも、ゆうかは「やだつてば! きょうは、ままごとだけ!」と動かない。

ゆうかは、なぜこんなにも抵抗するのだろうか?

ままごとをこんなふうに進めたいというアイデアも特にないように見えるし、ゆうかの答えを聞く限り、人形劇をやりたくない特別な理由があるようにも思えない。もしかしたら、自分の提案ではなく、まいの提案だから、すんなりとうなずく氣持ちになれないのかもしれない。

その後も、まいは何度も何度も説得を試みていたが、相変わらず、ゆうかの答えは「だめ!」というものだった。私は、まいの粘り強さに驚くとともに、何だかまいが氣の毒になつてきた。

すると、突然まいが、思い切つた明るい声で、「あつ! いいこと、いいこと考えた!」と言ひ、「ねえ! ゆうかちゃん、ちよつと来て! いいこと考えたんだ!」と手を引いて、おうちから出た。あれほど抵抗していたのに、ゆうかは、まいのその明るい声に惹かれるように思わず手をつないでおうちから出てしまつた。ふうん、ゆう

かが、おうちから出たけど、どうする気だろう：と見ていると。

まいは、ゆうかの手を引いて、迷わず人形劇の衝立の所に行く。と衝立を出して、「お客さん、ここに座ることにしよつか？」とゆうかに聞く。ゆうかは、「お客さんはこっちに決まってるよ。いす持ってきて！」と答える。まいは、「そうだね！」といすを運んでは、ゆうかに渡す。ゆうかは、いすを並べながら「もつと持ってきて！」とまいに言う。

動きが出てきたからか、ゆうかがリードする流れになったためか、ゆうかの表情がいきいきとしてきた。「もう、いすいいよ！ 人形持ってこよう！」とゆうかが言い、まいと二人でおうちからぬいぐるみを持つてくる。「私、キツネで、まいちゃんが、ネコとウサギね」とゆうかが言うのと、「いいよ」と答えるまいもうれしそうだ。



MAORI

いよいよ人形劇が始まるころ、ちょうどきれいなバッグを完成させたところだったけいが、ふらっとやって来て、観客用のいすに座る。「人形劇見たいの？」とゆうかが聞くと、けいは「見るの」と答える。ゆうかは、けいに、真ん中あたりのいすを指差して、「そこに座ったほうがよく見えますよ」と、けいを移動させる。ゆうかは、ほかにもお客に来てもらいたい様子で、あたりを見回すが、みんな自分の遊びに忙しく、お客になりそうもなかった。その間も、まいは忙しく準備しながら待っていた。

私は、もし、このまま時間がたつてゆうかの気持ちが変わってしまったては残念な気がしてきた。そこで、ゆうかから位置的には離れてはいたのだけれど視線を送ってみた。すると、ゆうかはすぐに私の視線に気づいて、「見たいの？」と聞きに來た。「見たいなあ」と答えると、「じゃ、見てね」と走って戻る。

ところが、人形劇が始まってすぐ、けいが突然「おしっこ行く！」と立つて行ってしまった。まゝは、そのことに気づかず人形劇に一生懸命なのだが、劇が始まってからも時どき客席をのぞいていたゆうかは、すぐにけいの不在に気づいた。動きが止まり、その瞬間ふつと私と目が合う。ゆうかは、慌てて続きを始め、そのうちにけいも戻り、無事に人形劇が進んでいった。

「いいこと、いいこと、考えた！」は、幼い子ど

もがよくつかう言葉である。しかし、まいのこの言葉のつかい方の見事さに私は驚かされた。おそらく、その前に試みていた「理を尽くした説得」もゆうかの心を動かしてはいたのだろう。しかし、理屈でわかっても、気持ち動けなくなってしまうことは多い。そんなタイミングでの「いいこと、いいこと、考えた！」という言葉の響きは、ゆうかの気持ちの壁を飛び越えさせてくれるものだったに違いない。

それにしても、担任は、ゆうかについて「いつも遊んではいませんが、どうも遊べていない気がして……」と言っていた。なるほど、ゆうかは遊びそのものに没頭しているというよりは、いろいろなことが気になって仕方がない様子だった。そんな姿から、担任の言葉の意味が少し理解できた気がした。

(東京家政大学)